



Title	多様性に対応したブルックリン日本語学園での継承語教育の実践
Author(s)	中野, 友子
Citation	母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究. 2017, 13, p. 33-61
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/69351">https://hdl.handle.net/11094/69351</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

◀ 招待論文 ▶

**多様性に対応したブルックリン日本語学園での  
継承語教育の実践**

中野 友子 (ブルックリン日本語学園)  
tomoko.nakano@bjafa.org

**Heritage Language Education at Brooklyn Nihongo Gakuen,  
New York**

Tomoko Nakano

要 旨

ブルックリン日本語学園は、人種、国、民族、文化、宗教、言語、生活スタイル、家族の形の超多様なニューヨークブルックリン地域の日系コミュニティの中から生まれた継承日本語学習者のための学校であり、開園6年目となった2016年度9月現在、3歳から13歳までの児童生徒132名が学んでいる。継承日本語学習者が自ら日本語を継承していくことを実感できるような継承日本語教育のためのプログラムを目指し、現地校での学習知識を共有し、日本語を使つての交流をおこし、さまざまな学び方を取り入れ、児童生徒がオーナーシップを持てる、独自のカリキュラム、指導法を実践してきた。本稿では言語環境調査から明らかになった児童生徒を取り巻く多様な言語環境と、超多様性に対応した取り組みについてカリキュラム、指導実践例と共に紹介する。

Abstract

Brooklyn Nihongo Gakuen is a Japanese Heritage Language School founded in the culturally diverse community of Brooklyn, New York in 2011. The goal of the program is to provide Japanese heritage students with a meaningful learning experience so that they will become an autonomous learner of Japanese and grow to appreciate their Japanese heritage. The school's thematic integrated curriculum has been designed to correlate with the New York Curriculum. This allows students to share their common academic knowledge in both English and Japanese to develop a deeper understanding from different perspectives. This program promotes a learning environment by creating interactive activities between students and their parents at home and more hands-on activities in the classroom to foster

a “child centered approach”. This paper focuses on the Heritage Japanese Program in Brooklyn by portraying the students' diverse linguistic environment based on the survey and the practice of effective heritage curriculums.

キーワード：多様性、ブルックリン、継承日本語指導法、継承日本語カリキュラム、オーナーシップ

## 1. はじめに

近年の国際化の波は 国境という垣根を低くし、日本人は容易に日本を離れ、世界の様々な土地で 家族を作って生活を始めた。新しい土地で、二つ以上の国をバックグラウンドに持つ子どもたちが増加している。現地で現地語を日常語として生活する長期滞在者、永住者の子どもたちにとって、両親の祖国のことばは、自身のアイデンティティーに深く結びついている。海外に居住し日本人のルーツを持つ子どもたちに日本語を学ばせたいと願う保護者は多いが、唯一の日本語教育機関となる補習校は駐在員の子弟が数年後日本の教育システムに戻ることを前提とし、日本の学校教育の内容を週一度の短時間で補うという学習方法をとっていることから、継承日本語学習者にとっては、現地校での学習内容との関連がない学習内容を十分に理解ができない、暗記、反復学習に対して苦痛を感じ、価値を見出せないなどの理由でドロップアウトするケースが少なくない。そういった子どもたちのために「継承語としての日本語を学ぶことができる学校を」という声は世界中のさまざまな場所で起きている。ここアメリカ、ニューヨーク州ブルックリン区もその例外ではない。

多様なアメリカ社会の中でも特に多くの移民が暮らすニューヨーク州ブルックリン区は、さまざまな面で多様性にあふれた超多様な特徴をもった地域である。歴史的にもさまざまな国からの労働者階級の移民が住む地域として発展してきた。中国系、カリビアン系、アフリカ系、ラテン系、ロシア系、ポーランド系、イタリア系、アイルランド系、ギリシャ系、ユダヤ教徒、イスラム教徒、同性愛者、芸術家など、国、宗教、民族文化、生活スタイルをもった多様なコミュニティが混在している。働き盛りの若者、学齢期の子どもがいる家庭、母子家庭も多い。家庭内言語についても、公用語である英語以外の言語を話す家庭が半数近くもあり、コミュニティの中で出身国の継承語、文化を教えるための継承語スクールやプログラムも数多く存在する。

こういった環境の中で、日系の永住・長期滞在家族の急増に伴い、日系コミュニティ

が発展し、継承日本語教育の機関として子どもが日本語を学べる学校設立の機運が高まっていったことはごく自然の流れだったのかもしれない。

本稿は、このような超多様性を呈する日系コミュニティから生まれたブルックリン日本語学園での継承日本語教育実践について報告する。

## 2. ブルックリン日本語学校に通う子どもたちを取り巻く多様な環境

本章では、ブルックリン日本語学園<sup>1)</sup>（以後学園）に通う児童生徒を取り巻く言語環境について、2016年6月現在に在園する全児童生徒、年中20名、年長20名、1年17名、2年18名、3年14名、4年12名、5年6名、7年1名の計108名の保護者から回答を得た言語環境調査アンケートの結果を踏まえ、1. 多様な家族のかたち、2. 多様な教育事情、3. 多言語環境、4. 多様な日本語の発達の観点から順に論じていく。

### 2.1 多様な家族のかたち

児童生徒の保護者の89%は、日本人（又は日系人）と日本人以外との国際結婚家族で、児童生徒の88%は日本・アメリカの2国籍、または多重国籍保持者である。家族の滞在状況は、長期滞在者家庭（97%）、または永住者家庭（2%）である。

家庭状況を見ていくと、両親が共働き、母親が生活収入を賄う世帯主で父親が家庭で育児家事を担当する主夫であったり、離婚家庭、母子家庭であったりと、これもまた多様である。そのため、子どもたちをとりまく日常も、日本語を話すベビーシッターや英語を話すベビーシッターと過ごしたり、また、離婚家庭においては、子どもは一週間のうち月曜日から金曜日の週日と土曜、日曜の週末を父親と母親の家を行き来したりと、日本語、英語、その他の言語と、多言語が交錯する環境にある。

### 2.2 多様な教育事情

学園の児童生徒が週日通う学校を見てみると、居住する地域の学区にある公立学校が最も多く、次いでニューヨーク州のチャータースクール、ニューヨーク市内の私立学校、ニューヨーク市以外の公立学校となっている。

ニューヨーク市の公立学校には多彩なプログラムが用意されていて、特に秀でた才能や能力が認められた児童生徒には、学習の進度が早く難易度の高いギフト&タレントというプログラムがあり、学園の通園者の中でも9名の児童が参加している。また、ニューヨークカリキュラムを2言語で学習するというデュアルランゲージプログ

ラム (DLP) は、ターゲットとなる言語を母語とする児童、英語を母語とする児童半数ずつのクラスで、お互いの母語を学び合うバイリンガルプログラムである。スペイン語、フランス語、中国語、クレオール語、ロシア語、韓国語の DLP があり、2016年度からニューヨーク初の日本語プログラムも正式に始まった。学園の児童生徒のうち12名がスペイン語、フランス語と日本語プリスクールプログラムに参加している。

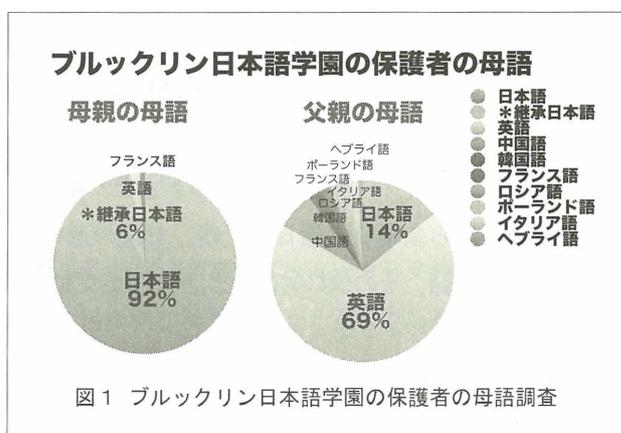
ブルックリンでは、学校・学区による児童生徒の学力の差が大きく、教育熱心な家族は成績の良い学校・学区を求めて住む地域を移ることから、テスト結果が良い学校の地区は不動産の価値も高くなる。近年全米統一指導要領「コモンコアスタンダード」<sup>2)</sup>が導入され、児童生徒の全米標準テストの結果で担任の先生や校長、学校自体が評価され、また、個人のテストの成績が進学する中学校の決定に影響することから、テストの数ヶ月前からは毎週土曜日に児童生徒を集めテストに向けての補習授業が行われ、土曜日の継承語クラスの出席にも影響が出ている。

ブルックリン地区の日本語教育機関としては、2010年の学園開園以降日本語教育への関心が高まり、それに伴って需要も増え、新しく週末(隔週)継承日本語学校(幼稚園部、小学部)、週日バイリンガル幼稚園ができた。2016年度から公立の「日本語DLP」が始まる。

### 2.3 多言語環境

学園の子どもたちを取り巻く言語環境は、保護者のほとんどが国際結婚であることから多様であることが明白である。

図1は、学園の保護者の母語を示すが、母親(2言語以上を母語とするものも含む)



の92%は日本語を母語としているが、継承日本語であるという母親も増える傾向(6%)にある。母語が英語、フランス語、継承日本語の3言語であると答えた2世の母親、また、日本語の理解が十分でない継承日本語話者の母親も出てきている。

一方父親の母語は、日本語を母語とする父親はわずか14%、英語69%が最も多く、その他17%は中国語、韓国語、フランス語、イタリア語、ロシア語、ポーランド語、ヘブライ語と多様である。

家庭内での言語の傾向を家族のかたちから見ていくと、学園で一番多い、母親が日本語母語話者で、その他の言語を母語とする父親との国際結婚家庭では、2ヶ国語以上の言語が混在する多言語環境であることがわかる。保護者が日本人で日本語母語話者同士の永住者、長期滞在者家庭の中には、家庭内では日本語を徹底して話すという家族がある一方、現地校で英語を覚えて話す子どもに合わせて普段の生活の中でも英語と日本語を混ぜて話す、または、英語が家庭の主言語になっていく場合も見られる。



図2 家庭内での使用言語調査

日本語継承語話者と非日本語話者の家庭では英語のみが家庭言語となっていることから、今後継承日本語話者の保護者が増加する傾向にあることを考えると、家庭で子どもの日本語をどのように援助できるのかが課題となる。

これについて「母親から子どもへの話しかけ」「父親から子どもへの話しかけ」の言語調査を見てみると、さらにその状況が明らかになってくる。

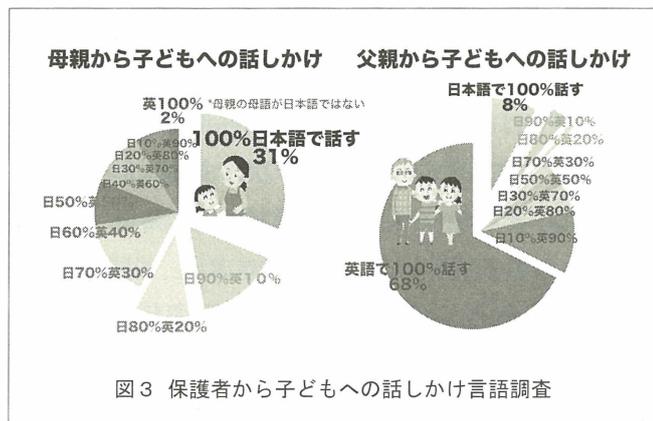


図3 保護者から子どもへの話しかけ言語調査

「保護者から子どもへの話しかけ調査」(図3)のグラフからもわかるように、母親が日本語と英語を使う割合をみると、母親が日本語である母親が子どもと一緒に過ごす時間は

できるだけ日本語を話し何とか日本語を維持しようとしていることがうかがえる一方、現地校の宿題を手伝うなど英語を使ってのやり取りをすることも多くなっていく。

また、日本語母語話者の母親でも家族の共通語として英語を使って子どもと意思疎通をする母親もいる。父親について見ると、日本語母語話者の半数が日本語だけで答えたのが一番多く、日本語と英語を半々で話すという線までにはほぼ全員が属し、子どもと一緒に過ごす時間が少ない父親も何とか日本語での会話を維持しようと努力する姿が垣間見られる。18人の非日本語母語話者の父親が日本語を話すと答えた結果も興味深く、子どもの日本語教育への関心が高いと捉えることができるだろう。自身の母語を少し話すと答えたのは8名、50%話すと答えた人は3名、自身の母語を50%以上の比率

で話すと答えた人も5名いたことから、父親自身の母語継承にも真剣に取り組む家庭内言語の様子がうかがえる。

さらに、兄弟姉妹間で使われる言語の調査のグラフ(図4)から、英語が強くなるにしたがって、兄弟姉妹間では意思疎通するのは英語の方が容易で、言いたいことが言える言語となっていることがわかる。

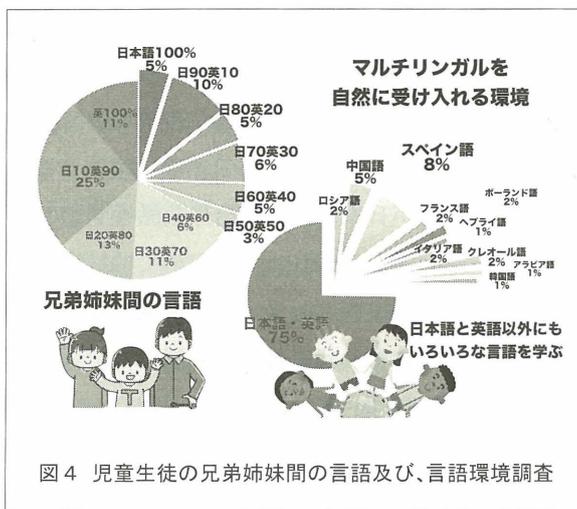


図4 児童生徒の兄弟姉妹間の言語及び、言語環境調査

また、児童生徒の使用言語についての調査から、日本語と英語の二言語のみならず、父親の母語、学校の多彩な外国語プログラムにより多様な言語を学ぶことができる環境、マルチリンガルを自然に受け入れる環境がすぐ身近にあることがわかる。

## 2.4 多様な日本語の発達

学園に通う子どもたちの日本語の発達は、多様な家庭環境、言語環境による日本語の接触量、保護者の継承日本語教育に対する考え方、家庭での取り組みにより、一人一人が独自の発達をしていると言える。その他、男女差による精神的な発達、身体的な発達、社会的か内向的かの性格によっても大きく左右される。

また、成長に従って児童生徒の言語状況も変化していく。幼児期から年少時期においては、日本語母語話者である母親と一緒に過ごし日本語で交流する時間が多く日本語が強くなる傾向にあるが、学齢期になり現地校の学校に通い始めると、現地語である英語で知識を得、英語で学校生活の日課を通して得た語彙など、生活言語にも多くの

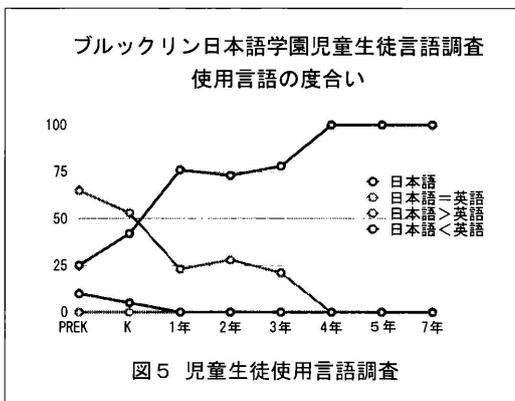


図5 児童生徒使用言語調査

英語の語彙が混ざってくる。そして、高学年になり、現地校で学ぶ内容も学習語彙が多くなり、学習内容も抽象的な事象を論理的に理解することが多くなると、それにしたがって、現地語である英語で考え、その英語でのロジックを使って日本語を話すようになってくる。

学園児童生徒使用言語調査(図5)

のグラフを見てもそのことが現れ、年中（プリK）クラスでは日本語優位であった児童も学校が始まる年長（K）から1年生に移行する間に見事に英語と日本語の優位が逆転し、4年生からは100%英語が優位となっている。

### 3. 超多様性に対応した継承語教育の取り組み

「超多様な子どもたちに、継承日本語教育の枠組みを通して、なにをどう教えたらいいのかわかるか。」この問いは、継承日本語学校を始めるにあたり誰もが抱く問題である。継承日本語教育のカリキュラム、指導法というものがないからである。ブルックリン日本語学園のカリキュラム、指導法の作成にあたって、継承日本語学校の設立活動に携わった親たちの声や要望を真摯に聞き沿うことが重要であった。ここでは、ブルックリン日本語学園の設立の経緯、地域が一体になって継承日本語教育を成功させるため立てた教育目標、学園で育てたい日本語の力、カリキュラム作成にあたりどのようなことを重視していったのか、実際のカリキュラムを例に、各学年での指導法、教材開発を含めた実践を紹介していきたい。

#### 3.1 ブルックリン日本語学園設立の経緯

2006年6家族8人でスターとした日系子育てグループ「ブルックリンで子育て」は週一回の日本語プレイグループクラスの他、日本語教育と子育てに関する啓蒙と教育セミナーの開催、家族参加のイベントの開催を通し大きくなっていった。

2010年には学齢期に達した児童のための継承日本語学校作りの構想を掲げ、2011年にNPO BJAF（ブルックリン日系人家族会）が発足した。従来のブルックリンでの子育てに便利な情報を提供するサイト「ブルックリン子育て便利帳」<sup>3)</sup>、子育てのための啓蒙、教育の場を提供する「セミナー開催」、家族参加の「日本の伝統行事、季節の催し開催」などの活動に加え、新たに継承日本語学校「ブルックリン日本語学園」が6ヶ月の試行期間を経て2011年9月に開園した。開園にあたっては、子どもたち一人一人の多様な家庭環境、日本語環境に配慮した「継承日本語教育」への要望として次のことが求められた。

- ・ 国語として日本語を教える補習校とは異なる教授法の模索－継承日本語教育
- ・ 児童が意欲的に学習を継続できるような学校作り－毎週クラスに参加するのが楽しみになるようなクラス運営

- ・子どもたちが主体となるクラス作り—子どもたちが考え、選び、発言する、子ども主体の活動、子どもが発言しようとする姿勢を尊重し、励ますクラス運営
- ・英語の使用に対する柔軟な対応—指導者は日本語のみ、但し子どもの英語での発話を否定しない。伝えようとする子どもの気持ちを尊重し日本語で聞き返し、言いたいことを日本語で確認
- ・子どもたちの日本語レベル、状況に応じた目標設定—家庭での状況、日本語に対する目標の違いを把握するための保護者との意見交換を積極的に実施
- ・保護者と家庭を巻き込んだクラス運営—すべての保護者がなんらかの形でクラス運営に参加するボランティアによる担当制

### 3.2 ブルックリン日本語学園の教育の理念と教育目標

継承語学習者のほとんどは、親が自分の母語を子どもに伝えたいという親の選択である。しかし、子どもの方は成長するにつれて環境言語である現地語で考え、現地語での意思表示の方が容易に感じるようになる。小学校3、4年生になると現地校での学習も難しくなり、宿題や課題活動などの増加につれて日本語学習の優先順位はますます下がってくる。補習校に通う継承日本語学習者は徐々に補習校での学習内容も抽象的になるため理解できなくなり、さらに補習校での学習と現地校で学習する内容との関連が見いだせなくなり、日本語学習への興味を失うだけでなく、反復学習で覚える漢字学習やドリルの宿題が苦痛となる。日本語を学ぶメリットが実感できない、日本語自体が嫌いになってしまう最悪なケースも出てくる。自分にとって難しいことば、苦勞の多いことば、わからないことばになってしまうからである。継承日本語教育の課題としてよく挙げられるのが、学習者自身がいかに日本語学習の価値を見いだせるか、学習者が前向きに取り組めるような指導の方法や工夫によって、日本語の技能の発達のアンバランスをいかに克服していくかである。

このような継承日本語学校に対する要望と、継承日本語教育の課題を踏まえて、ブルックリン日本語学園のカリキュラム作りが始まった。まず、ブルックリン日本語学園が多様性に富んだニューヨークブルックリン地域の日系コミュニティで、どのような子どもたちを育てていきたいかという理念となる以下のような教育目標を設定した。

- ・日本語や日本の文化を自分自身のポジティブなアイデンティティーとして身につける
- ・生涯にわたり日本語を学び続けたいという気持ち、日本文化への興味を育てる
- ・多文化、多言語の環境の中で広い視野に立った柔軟な考え方ができるようになる

・ブルックリン日系コミュニティの一員であることに誇りを持ち、自ら継承者となる

また、継承日本語教育において曖昧になりがちなのは、どのような日本語の力を子どもたちに身に付けさせたいかである。バイリンガルとして、また、マルチリンガルとして、話す、聞く、読む、書くの四つの技能をどの程度身につけさせることを望んでいるのか。日本語検定や、漢字検定の級やタイトルを得ることが継承日本語教育や学習のねらいではない。現地の学校教育での学習知識は、様々な国をまたいで重複する部分は大きい。その知識を両言語で共有し児童生徒が自分を表現する手段となり得ることができれば、その学習の意味を学習者自身が実感できるようになる。言葉のフィールドをまたいで、自分でコントロールできるようなさまざまな知識のボールを転がしながら継承日本語学習者としてオーナーシップ（主導権）を持ち、将来にわたって自律学習者として日本語の技術を自ら磨くことができるのではないかと考えた。つまり、継承日本語教育として子どもたちに身につけさせる日本語の力は、現地での学習と変換、転移ができるような力であり、自ら学習意欲を起こすための起動力である必要がある。それには、できるだけ自ら発信する力をつけ、多くの人と交流を起こすことができる日本語でなくてはならない。そこで、学園での初等部、中等部を終了するまでに、次のような日本語の力を育てたいと考えた。

#### 話す・聞く

- ・話し合い、討論、発表形式、プレゼンテーションを通して相手と交流し自分の考えをきちんと筋道立てて説明できる力を養う
- ・劇、朗読において内容を理解し、自分が何を伝えたいかを考え、聴衆者、相手を意識した話し方ができる力を養う

#### 読む、書く

- ・自分の考えを伝えるために様々な資料を読んで、理由づけした説明文や意見文を書いたり、文学作品を読んで、登場人物や作者の考えを読み取ったり、他の言語で読んだことを比較・対照した文を書く力を養う
- ・文学作品の手法を使い、登場人物、プロットを考えて創作文を書く力を養う

### 3.3 ブルックリン日本語学園のカリキュラムの特徴

英語が現地語である場合、継承日本語はマイナスの価値付けをする傾向にあるので、

学習者がいかに学習の価値を見いだせるようにするかが大きな課題となってくる。継承日本語の学習は、学校だけの学習で終わるものでなく、将来に向けて学習者が自ら続けていく動機に結びつくものでなくてはならない。そこで、1. つながりを持たせる、2. 交流を起こす、3. いろいろな学び方を取り入れる、4. 自らが学びのオーナーシップ（自律学習者）を持つ学習活動を取り入れることをカリキュラムの柱として作成することを心がけた。

ここでは、児童生徒が自ら学習の価値を見いだせるようなブルックリン日本語学園カリキュラムの特徴について説明していきたい。

### 3.3.1 つながりを持たせる

子供たちが自分たちの学習していることは今現地校で学習していることにも役に立つという実感が持てることがとても大切である。これは、ジム・カミンズの「2言語相互依存の原理」(The linguistic interdependence principle) のバイリンガルの2言語には共有面があって一つの言語による教科学習を通して取得したものが新しい言語による学習でも役立つ(中島, 2010) という考え方にもあるように、「継承日本語の学習は現地校の学習に役立つ」「深い学びは転移する」ことをねらったカリキュラムを作るとはとても重要な鍵となる。週末継承日本語学校が土曜日の3時間という短い時間で、効果的に日本語で学習内容を理解し、どう日本語の技能を高めるかを考えた時に、一定期間同じテーマで、さまざまな教科、アプローチを通してテーマに対して興味を引き出し、知識を深めていく統合カリキュラムを使うことは、継承日本語学習の弱点である学習語彙を増やし、定着させるためにも効率的であると考えた。「テーマベース統合カリキュラム (Theme-based integrated curriculum)」とは、「関連したさまざまな教科の知識に広げ、探究することができる統合された学習法である。子どもたちは人文科学、コミュニケーション学、自然科学、数学、社会科、音楽、芸術に関連性があることを知ることができる。そして、一つの分野に限らずさまざまな分野での学習技術と知識が養われ、それらを適応することができる」(Humphreys, Post, and Ellis, 1981)。学園の統合カリキュラムのねらいは、「ニューヨークカリキュラム」<sup>4)</sup>を視野に入れ、科学、生活科、社会科、算数、芸術(美術・音楽)言語(読む、書く、聞く、話す)、表現活動(身体表現・ドラマ)、料理、日本の伝統的文化に学習をつなげ、学習を広めて「テーマ」の深い理解を起こすもので、教科学習、体験、実生活の知識を全て融合させることにより、学びがより触知できるものとして児童生徒自身が学習の意義を感じることである。

### 3.3.2 交流を起こす

カミンズの「対人コミュニケーション活動充足の原則」(The sufficient communicative interaction principle) にもあるように、人との十分なインターアクションがことばの発達にはかかせない(中島, 2010)。しかし、従来の教師主導の授業スタイルでは、学習者は常に受け身である。交流には、理解を活性化させる効果があり、聞いたことを質問する、読んだこと、理解したことを説明することで理解がさらに深まっていく。

- ・**クラス内交流** 学園では、児童間の交流を起こすことをねらいとし、年少クラスを除いて初等部では2学年が同一のクラスで学ぶマルチエイジクラス編成になっている。これにより、ペアーやグループでの教え合い学び合うことで共に理解を深めていく児童同士の交流を起こすことができる。上級生が下級生に教えながら問題を話し合い、答えを考えることを通し、日本語の発達度の差を越えて一緒に成功感を味わうことができる。上級生は下級生に教えることで学習が定着し自信を持つことができる。
- ・**異学年交流** 「読み聞かせ交流」「おみせやさん」「学習発表会」など、上級生が下級生との交流をリードすることを通して、自らの日本語学習の成果を実感し、自信を培う。下級生の児童にとっては上級生を同じ継承日本語学習者のメンターとして見ることで、日本語を学ぶ動機、期待感を持たせることができる。
- ・**家庭内交流** 日本語母語話者の保護者と子どもを向き合わせるため、家庭で日本語を使って交流を起こすことは継承日本語教育のとても重要な役目である。学園の宿題は、オープンエンドの宿題で、決まった答えを書くのではなく、保護者と児童生徒が一緒に取り組むことを通して交流を起こすことがねらいである。家庭で一緒に取り組んだ宿題で課題に即した日本語語彙、表現も増え、自信を持って発表できるようになる。

### 3.3.3 「いろいろな学び方を取り入れるー学び方の工夫で意味を実感」カリキュラム

子どもたちは「わかる」を実感できれば、学ぶことが楽しくなり、自ら学習に興味を持つことができる。継承日本語学習者の日本語の発達には大きな差があるが、現地校で培われた学習知識レベルを維持し、日本語での学習内容を理解させるためにはその学び方、指導の仕方を工夫することがとても重要である。

- ・**五感を通じた体験** 体感活動はマルチレベルの児童生徒に共通理解を起こし、一人一人のことばも豊かにする。学園のカリキュラムには体験、体感、実験を通して、「わかった」「感じる」ことを重視し、語彙、教材文、文字、に結びつけて表現できるように、それぞれのレベルにあったアプローチで指導していく。
- ・**社会・実生活の仕組みと結びつけた活動** 「ことばを獲得するためには言語の通常の

社会的やり取りの環境に置かれる事が不可欠である。」(内田, 1999) 学園では授業の中に意図的にこの環境を作り出している。ごっこあそびを通したやり取り、実験室の研究者となつての実験、運転免許取得、獣医の実習を通して社会の仕組みや仕事につなげた学習、文字情報の働きをと意味を、料理本、ラベル、パンフレット、新聞などの書く活動につなげた学習活動を通して、興味を引きつけ、意味のあることばの獲得に結びつけることができる。

### 3.3.4 「自らが学びのオーナーシップを持つ」カリキュラム

継承日本語は親が子どもに習わせたいことばであり、親の選択で始まる。継承日本語を継続させるには、継承日本語を学ぶことが自分の選択になることである。そういった意味では、早い段階から自分が学びの主人公であり、児童生徒が自分の学習にオーナーシップをもち主体的に取り組めるようなカリキュラムが必要である。カリキュラムは、児童生徒が自ら考え、感じることを重視し、主体的に活動、学習する力を養い、自律した学習者を育てることをねらいとする。学習活動に話し合い活動、発表活動、プレゼンテーション、ドラマを取り入れ、自らの伝える力を起動させることが重要である。

以下はその狙いを達成するための学園全体の取り組みである。

- ・ **学習発表会** 12月一学期最終日に各学年、学習のテーマに結びつけた劇を舞台で日本語を使って演じ全学園児童生徒・保護者・ゲストを観客に発表する。
- ・ **おみせやさん** 縦割りで交流の活動で各クラスが話し合いテーマにあった店を出店し、売り手、買い手に分かれてやり取りをする。お店は児童生徒が主体となり運営する。
- ・ **児童生徒主導型面談** 児童生徒が保護者に向けて自分の学習成果を学習のデモンストレーションすることで自らの日本語学習のオーナーシップ意識を育てる面談。準備段階では、教師の援助、アドバイスのもと、自らの学習成果をコンティニウム(Bonnie Campbell Hill Developmental Continuums<sup>5)</sup>を参考に、学園カリキュラムと日本語発達段階を合わせた学園独自のコンティニウム)に自己評価し、次の目標を決定する。面談当日は児童生徒が主体となって面談を進め、目標達成のための支援を保護者が約束しサインする。
- ・ **進級体験活動** 進級する新学年への期待と学習に対する意欲を持たせるため、次年度のマルチエイジクラスでの学習体験活動を児童生徒が主体となつて行う。学年末の1日の一コマをクラスの下級生は新しく進級してくる児童生徒にクラスで学習したことやクラスのルーティーンを紹介、一緒に次年度の学習を体験する事で新しいクラスで上級生になる自覚を持たせることができ、進級する児童生徒とは新しいクラスでの

学習活動に安心感を持つことができる。

- **プレゼンテーション** 6月3学期の終業日を締めくくるプレゼンテーション活動では、好きなこと、得意なことの中から自らテーマを設定し、調べ、プレゼンテーションボードを使って発表する。日本語でプレゼンテーションをすることで、日本語で伝えることに自信を持つことができる。マルチリンガルであることを奨励し、英語、中国語、イタリア語、フランス語、ポーランド語など他の言語でもプレゼンテーションが行われる。当日は日本語話者、非日本語話者の保護者、祖父母、親戚、知人が聴衆者となり児童生徒のプレゼンテーションブースを訪れ、発表を聞いた後各自の名札にステッカーが貼られる。多くの聴衆にプレゼンテーションを行い、聴衆の質問に答えるなどのやりとりを通して交流が生まれる。みんなに褒められ自尊心を高めることができる。

これらの学園全体の活動の他に、学習にオーナーシップを意識させるための活動について紹介したい。

- **本作り活動** 年中組では「マイブック」という自分が主人公の本を作る活動で「読みたくなる」を引き出す。「おおきくなったらなにになる」「あいうえお」の絵本では出てくる挿絵は自分の顔になっていて、世界で一つだけの自分の本となる。テーマのまとめとして、年中での「おおきなおおきなおいも」絵本と、年長・1年クラスの「のりもの図鑑」は印刷製本され販売、図書として貸し出しも行われる。2・3年生では自分の日常の生活を絵と文章で綴る「わたしの・ぼくのブルックリン」、また、「お話をつくろう」で作った絵本は年中クラスへの読み聞かせ交流で披露される。高学年の「マイ詩集」、中等部の歴史の本は、理解したことを自分なりの独自の視点でまとめることができる。
- **新聞、パンフレット製作** 4・5年生の新聞作成のテーマでは「ブルックリン日本語学園新聞」を児童が話し合っ項目や構成を考え、様々な人にインタビューをして作成する。児童自ら主体となって学園を知る活動につなげる。同様に中等部6年生の学園のパンフレット作りは生徒の目線から学園を宣伝する。

### 3.4 継承語教育におけるマルチレベルの指導

カリキュラムを実際のマルチレベルのクラスでどのように教えていくかは、カリキュラムと同様にとっても重要な部分である。マルチレベルに対応する指導においては、まず「一人一人の学びの発達を知る」ことが重要である。その上で「マルチレベルの指導」では一人一人の発達を考慮しながらどのように理解を導き、日本語の技能を伸ばしてい

くかを考えていかななくてはならない。

### 3.4.1 一人一人の学びの発達を知る

継承日本語学習者は、一人一人違った家庭環境で、一人一人異なった発達をしている。また、家庭を含めて学習支援の程度も頻度も全く異なる。そのため、学年や年齢の基準で指導を進めていくことは困難である。そこで、日本語の発達の過程を一連のコンテンツニュウムとして捉え、一人一人の児童生徒に対して発達に即した指導をしていくことが重要である。学園では、一人一人の児童生徒を知るために次のことを実施している。

- ・**児童生徒活動記録** 各クラスの担任教師が毎回児童生徒について学園での友達間の交流、社会性、日本語の発達などの様子を記録。この記録を通して、児童生徒にはどのような指導が効果的か、日本語の成長を通して次の学習のねらいを設定する。また進級や担任交代の時に、児童生徒の活動記録からの情報を指導に生かすことができる。
- ・**アセスメント** 「のびっこアセス」日本語の、話す、聞く、読む(DRA)、書くの発達について 各学期(9月、1月、5月)の放課後に行う。この結果についてはコンテンツニュウムに記録し日本語の発達を追っていきながら、児童生徒一人一人の次のステップを考えて指導することができる。
- ・**個人面談** 一学期の個人面談では保護者から児童生徒についての情報(性格、好きなこと、家庭での様子)家庭内の日本語環境、現地校の様子を聞きクラスでの指導に役立てるほか、担任からはアセスメントの結果に触れ、家庭での取り組みなどを話し合う。
- ・**学び方の特徴を知る** 児童生徒には一人一人異なった学習スタイルがある。視覚教材を通して理解する視覚学習者、音や音楽を通して理解する聴覚学習者、言葉や文字を通して理解する言語学習者、身体活動を通して理解する運動学習者、理屈や理由付けを通して理解する論理学習者、グループや他者との交流を通して学習するのを好む社交学習者、一人で学習する事を好む個人学習者がある。性格と共に学習スタイルを知り、学習理解に効果的な教材(視覚、映像、実験、音楽、演技、五感)やセッティングで指導をする。

### 3.4.2 発達段階に合ったマルチレベルの指導

前に述べたように継承語学習者は、家庭環境による日本語接触量、開始時期などさまざまな理由で一人一人の発達は多様で、知的発達と日本語の技術の発達が一樣でな

いことから年齢、学年という枠での一斉授業での指導は難しい。学園では、全体指導と、発達度別指導を組み合わせたマルチレベル指導を行っている。

継承日本語学習者は日本語の4つの技能のうち、対話面（聞く、話す）はある程度発達するが、認知力を必要とする言語面（読み、書き）の発達が遅れる。そこで、学園のカリキュラムでは学習内容については、継承語学習者の比較的強い部分、読み聞かせを聞く、説明を聞く、先生や友達の話を書く、発表を聞くなどの「聞く」と、読み聞かせについての質問に答える、自分の考えを発表する、質問する、先生や友達の話に反応する、賛成、反対の意見を言う、ロールプレーをするなどを通しての「話す」ことから「考える力」、「理解する力」をマルチレベルの全体授業の中で育て、「読む」「書く」については意味をもたせ興味を引き出していきながら、それぞれに合ったレベル別指導、個人指導を組み合わせでスキルを伸ばしていくことを考えた。実際の授業ではどのように全体とレベル別指導を組み合わせていくかを次に述べていきたい。

全体授業ではテーマでのコンセントを学ぶことをねらいとし、読み聞かせ、一斉音読、視覚的教材（ビデオ、写真、絵、実物）、実験、調理実習、ハンズオンの教材を使って行われる。読み聞かせを通して内容を「聞く」ことと、内容理解を引き出す質問に対し知っていること、考えたこと、分かったことを「話す」ことを通して理解につなげる。また、視覚教材、ハンズオンなどの体験学習、五感を通じた学習は日本語の発達の差を超え共通の理解を得ることができる。ここでは日本語のマルチレベルの児童生徒が教え合い、学び合うといった交流を引き出しながら学習活動が行われる。

日本語の技術の差は、レベル別の小グループで指導を行う。同じような発達の児童生徒が取り組めるワークシートを使ってのレベル別指導（L1、L2、L3）では、それぞれのレベルでのねらいに合わせた難易度で自信を持って取り組めるようにする。例えば、文字の認識の段階に応じて、文字スクランブルで語彙を作る、なぞり書き、視写、自分の力で書くなどの選択を与えることができる。特別に支援が必要な児童生徒に対しては個人指導をするボランティアのサポートをつけるなどして対応をする。

#### 4. ブルックリン日本語学園での指導実践例

学園での日本語指導について、「読む」ことについては「平仮名」「片仮名」「漢字」の順番で文字を覚えるという従来の指導から、シンボルで形からわかりやすい象形文字の「漢字」を成り立ちを通して教えながら、日本語の文字について「わかる」「面白い」を引き出し、年中クラス開始と同時に指導を始める。また、「平仮名」は、「一音、一

文字」のルールを現地語の「音と文字」の指導が転移されるように、音を表す文字として指導し、音の数、文字の数を意識させ語彙に結びつけていく。同時に、絵本に描かれている絵から読み取る力、予測しながら読む力を育て、それをことばにつなげる支援を行う。子どもたちが日本語で表現したいという気持ちを引き出すことが大切である。継承日本語学習者の語彙数は圧倒的に少なく、文章理解には現地校で使われている「読解のストラテジー」を積極的に応用することを奨励する指導が必要である。現地校では自立した読者になるため、自ら読みをモニターしながら読むことを奨励している。低学年の「読みのストラテジー」<sup>6)</sup>は、①挿絵を見る ②読み返す ③口を準備して一文字ずつ音を出す ④言葉のまとまりで（文字を語彙として）見る ⑤読めないところは抜かして先を読み進める、というように文字を意味のある言葉にして内容を理解するための方策である。高学年の「読みのストラテジー」になると ①理解を助けるような質問をする ②関連性（自分と、この文章と他の文章と、文章と、語彙）を見つける ③（話の結末、予想）推測する ④読みながら視覚化する ⑤既習の知識、経験などに照らし合わせる ⑥主題や作者の考えなど重要なことを見つけ出す、というように読解のための方策で、これらは日本語の読解にもあてはめることができる。また、書く活動においては、年中クラスでは手指操作などの身体の発達を促しながら、書けることを実感することを重視する。一音一文字が理解できたら、「文字スクランブル」で文字を並べ「語彙」を作り、それを「なぞる」「書き写す」、絵にラベリングをすることで「語彙」を書き、「語彙スクランブル」で助詞をつけて並べ替えて文章を書くことから、優位な「話す」技能を使って口頭でまず音声化して文章を作り、自分の音声を聞きながら文字化していくというプロセスを繰り返して行う。一文を書く、二文、三文を書く、まとまりのある文章を書くことから、段落をつけて自分の考え、主張を含んだ、初め、中、終わりの構成を持った文章が書けるようになることを目標にする。

マルチレベルを、クラスの中でどのように指導し、アンバランスな技能をどのように育てるかを、実践例を取り上げて紹介したい。

#### 4.1 プリK（年中）～K（年長）小1年クラスでのカリキュラムと指導例

3歳から6歳までのこの時期は、日本語母語話者と生活する時間も多く、初めて学ぶ語彙や表現が生活言語である日本語であることが多い。学園で学習することやそれに伴うことばも現地校の学習や英語のことばよりも先に学ぶことも多く、日本語で得る知識と共に「語彙」や「表現」を積極的に吸収していくことができる。このような理由から、語彙、表現については、沢山の絵本の読み聞かせから多くの発話を引き出していく。

また、学習の中に体験、実験、観察を多く取り入れて、発見（みつけた）、驚き（すごい、びっくりした）、理解（わかった）と言った感動を生きたことばへつなげていくことが大切である。

#### 4.1.1 プリK（年中）クラスのカリキュラムと指導例

プリK（年中）では、3～4歳児の発達に寄り添う形で、基本的な生活習慣に必要なことばの習得に結びつけるため、挨拶、名前、色、形、大きさ、数、体、気持ち、身近な生き物の成長（植物、動物、自分）にテーマを設定し自ら興味を持てるよう、遊びの要素を取り込んだカリキュラムを作っている。

新学期のテーマ「たんけん！さがしてみよう」では学校生活に関連した基本的な語彙、表現を学習する。探検ごっこは探す期待感と、発見した喜びを生み「見つけた！」という表現が発見につながることばとなる。絵本「あおくときいろちゃん」の読み聞かせでは、青と黄色の粘土の混合実験、実際に色が変わっていく過程を観察し好奇心を呼び起こし、その様子を表現することで自らことばを広げようとする力を起こす。

文字学習については、まず、漢字を成り立ち体で表現し、興味を持たせながら指導する。平仮名はテーマと結びつけ一音一文字で認識することから始め、徐々に文字のまとまりが意味のあることばを作り出していることに気づかせていく。

読む活動は、テーマと結びつけた自分を主人公とした絵本を自ら製作し、読み教材として使い「読める」から「読みたい」に導いていく。自分で作った本は家族に読みたい、読めた事を褒められればさらに多くの人に読みたいという意欲を起こす。

書く活動は、文字を書くことが実感でき「書くことを楽しむ」を重要視する。「たね」の文字の学習では、児童は校庭の地面に書かれた丸の中に「た」と「ね」の文字を幾つもチョークで書いていく。書いた後は、先生の言った文字の書かれた丸に移動するゲームを繰り返すことで、文字を認識し、音と文字をつなげて見ることができるようになる。

このように、プリKクラスでは日本語で学ぶ楽しさを一番に育てていく。

#### 4.1.2 K-1（年長、小1年）クラスのカリキュラムと指導例

K-1クラスでは、子ども達の行動も活発になり、そのエネルギーをどう学習の興味や知識欲に結びつけていくか、また、2学年の児童が在籍するマルチエイジのクラスで上級生と下級生が教え合い、学び合いが起こる児童主体の学習環境が作りやすいことを考慮に入れ指導していくことが重要となる。K-1クラスでは隔年毎にカリキュラムA、Bを繰り返す。K-1カリキュラムとその指導について、カリキュラムB「のりもの

くらべ」のテーマを例に説明していきたい。

テーマ「のりものくらべ」では、単元のねらいを、「乗り物の、『しごと』(目的)と『つくり』(構造)に着目し、いろいろな乗り物の『しごと』と『つくり』に興味、関心を持ち、調べたり、話したりできる」と設定した。そして、日本語の領域のねらいを、「話す」「聞く」で、それぞれの乗り物について既知の知識を話し、読み聞かせから乗り物について「しごと」と「つくり」の情報、知識を得ること、また、「読む」では、教材を音読すること、「書く」では、単元に出てくる語彙を書く、内容についての問いに一文で答えを書けるようになることと設定をして授業、指導計画を立てていく。

読み教材は「じどうしゃくらべ」(光村一年下)、「いろいろなふね」(東京書籍一年下)を使用し、その他テーマに関する絵本の読み聞かせを毎週行い、多くの乗り物に関する語彙、さまざまな表現を繰り返し聞くことでことばを増やし、理解を深めていく。読み聞かせの本に興味を持った児童がまた家庭でも繰り返し読めるよう教材図書貸し出しも行う。

他の教科との関連では、音楽で「はたらく車」「トラックの歌」「ふねがゆく」という歌を授業の中で取り入れる。繰り返し歌うことでもテーマの内容理解を深め、歌詞の中の語彙や表現もメロディーを通して定着させることをねらいとする。

ニューヨークカリキュラムの理科では「幾つかのものを観察し、どのようなところが似ているか、どのようなところが違っているかがわかる(K)」「用具を使って、それらの物が実際にどのように違うかを比べ、その様子を表すことができる(K)」「色、形、材質などの外観上の性質について観察して分類する(K)」「観察したことを話したり、書いたりして発表ができる(G1)」という学習のねらいがある。

このようなニューヨークカリキュラムの学習のねらいも踏まえ、指導は、まず、現地校でも取り入れているKWHL、Know しってるよ(既知の知識)、What しりたいな(興味)、How どうやって(方法)、Learned わかったよ(学習成果)のチャートを使い、テーマと自分とを結びつけることから始める。次に、どんなことを知りたいか、話し合いを通し興味を深め、読み教材「じどうしゃくらべ」を読みながら、「しごと」「つくり」がどのようにになっているかという学習のねらいに興味を引きつけていく。

このテーマでは、児童に自動車を安全に走らせるための交通のルールと学園生活の中のルール、クラスマネジメントにも繋げ、教習所に見立てた教室で免許証を取ることを目標に学習に取り組む。また、問題解決の力を養うための活動や「ふね」や「ひこうき」の実験を通して論理的思考を促す力を養っていく。

読みの指導は発達に応じて指導をしていく。ニューヨークカリキュラムのキンダーガー

デン (K) と 1 年生のランゲージアートのカリキュラムでは「頻繁に目にする語彙をすぐに読む (K)」、「文字と絵を使って表記、表現する (K)」、「場面に応じて新しい語彙を覚えて使う (K)」、「文章を読む時、また、他の人が読んでいる時、指で文字を追う (K)」、「大切なことを理解させるために、書いたり絵を描いたりする (G1)」、「文字に音があることがわかり、発音する (G1)」がねらいとして挙げられている。

一音一文字の文字を認識し始めている児童のグループには、このテーマのキーワードである「くるま」「しごと」「つくり」「じどうしゃ」について、文字スクランブルを通して指導する。文字スクランブルとは、「ま」「く」「る」という文字を、並べ替えて意味のあることばを作る活動である。「くるま」と言う語彙を認識することができたら、本文の中に「くるま」という語彙を見つける。「くるま」を語彙として認識できるように、くるまを丸で囲い、くるまという文字と意味をつなげ読めるように促していく。語彙をまとまりで読めるようになった児童は助詞を意識させながら文章として読めるように指導をしていく。音読は全体授業での山びこ読みという音読法を行う。音読は耳からことばを入力することができるので、マルチレベルの一斉指導に適している。読んでいる内容が体験できるように教室内にバスをつくり、バスの運転手や乗客になっての音読も行う。このようななりきり演出は特に低学年の場合とても有効である。

書く活動は、3つのマルチレベルに合わせたワークシートを通して、全員が「できた」という達成感を感じられるように教え合いながら取り組む。L1は、文字スクランブルを使って、声に出して「ざせき」「まど」「ひろい」の語彙を作りそれをなぞる、L2は、視写する、L3は、自分の力で語彙を書く、語彙をつなげて文章を作る、というようにそれぞれの達成のねらいに沿ったものである。教師は児童をモニターしながら、次の段階へチャレンジを与えたり、必要であれば個人指導をしたり一人一人に合わせた指導をする。

#### 4.2 小2－3年クラスでのカリキュラムと指導例

この学年では現地校の学習でも学習知識の専門性が深まっていく。ニューヨークのカリキュラムからランゲージアートの「読む」力と「書く」力について見ると、2年生では「作り方などの情報の書いてある文章を読んで、そこに書かれている情報、事実、考えを収集する」、「物語の中で書かれている登場人物について類似点、相違点を比べ比較する、助けを得て一つの問題について複数の情報を比較する」、「本について、題、作者、挿絵を明らかにして、その本の内容、個人的な感想を添えた説明的文章、感想文を書く」、「書く手順に従って、書きたいことを分類する、下書きをする、推敲する、編

集する」から、情報を読み取る力、段階を踏んで文章を書く力が求められている。また、3年生では、「二つ以上の資料を基にして、整った、明確なレポートを書く」、「創作文、報告文を書く際、中心となる考えと、それを裏付ける詳細をはっきり表す」、「一つの主題に対して二つ以上の資料を比較、対照する」、「データの記録、事実（分かったこと）、考えをノートに書く」、「登場人物、構想、場面、会話を含む自分の話を作り上げる（書き始める）」、「読み聞かせを思い出してノートを取る、グラフィックオーガナイザーに書くなどして、大切なことや考えをまとめる」、「本を読むこと、辞書、類語辞典から、新しい語彙や概念を学ぶ」、「自分で書いたものを、綴り字、読点の間違いを直して自分で書き直す」、「書かれた指示を読んで理解する」から、読む量、質ともに難易度が増し、書くことにもさまざまな技術が要求されている。

このような現地校での学習を踏まえ、また、多くの児童がまとまりのある文章を読めるようになってきていることから、2－3年生のカリキュラム作りの日本語学習のねらいを、物語・創作物語では、登場人物の心情理解、また説明文においては文の構造に目を向けることとした。この学年もK－1と同様、カリキュラムはA、Bを隔年毎に繰り返す。2－3年カリキュラムとその指導について、カリキュラムBの「動物」のテーマを例に説明していきたい。

「動物」のテーマを現地校ニューヨークの理科のカリキュラムでは、一年生で「動物の体の部分について構造を比べその違いがわかる」、「動物の体の構造とその働きについてわかる」、「他の動物と体の構造の特徴を比べる」、「体の構造の特徴が生きていく上でどのように役立っているかわかる」、「動物の親子はよく似ている、他種類の動物もそれぞれに似ている」、「生物の特徴は遺伝する」、「動物の一生と寿命」、「観察したことを話したり、書いたりして発表する」について学習をする。

そこで、このテーマでのねらいを「動物の赤ちゃんの成長の様子を、教材を通して肉食動物と草食動物の成長の違いを読み取り、体の特徴とその理由に興味をもつ。動物園の動物の命を守る獣医について、一日の仕事を通して学ぶ」とし、日本語の言語領域のねらいを「話す」では、動物について知っていることを話すことができる、肉食動物、草食動物の特徴と、獣医の一日の仕事について話すことができる。「聞く」では、読み聞かせの本から、動物や獣医の情報を聞き取ることができる。「読む」では、教材を句読点に注意して音読することができる。「書く」では、肉食動物、草食動物、獣医の仕事について読み取ったこと、知っていることを文章に書くことができると設定をして授業、指導計画を立てていく。読み教材は「どうぶつのあかちゃん」(光村1年下)「動物園のじゅうい」(光村2年上)を使用し、その他読み聞かせ教材として関連する20

冊以上のマルチレベルの本をクラス内で紹介し貸し出しを行う。

この教材を読むにあたって、2-3年クラスの児童はK-1クラスでテーマ「とり」の教材「とりのくちばし」からくちばしの「かたち」と「はたらき」の関係を、また、テーマ「のりもの」の教材「のりものくらべ」から「しごと」「つくり」を読み取ることがを学習している。この「どうぶつのあかちゃん」の教材は、ライオンとしまうまの違いを「うまれたときは」、「ニヶ月ぐらいは」、「一年ぐらいたつと」の時系列で成長していく様子を、また、「動物園のじゅうい」では動物園の獣医が「どんな動物」に「どんな仕事」、「どうして(理由)」という一日の仕事を「朝」「お昼」「夕方」「一日のおわり」という時系列を表すことばを手掛かりに読み取ることがをねらいとする。

「動物」のテーマの指導はKWHLを使用して、テーマと自分をつなげることから始まる。子ども達は現地校の1年生で動物について学習していることから、動物について多くの知識を持っていることがわかっている。「知っていること」を一人一人が話し、それを書いて張り出し既習の知識を共有する。続く「どんなことを知りたいか」では、一人一人学習の課題に対して問題意識を持たせることが大切である。

授業の導入の後には、教材の最初の段落を読み、この説明文で何を読み取るか、ライオンとしまうまが「生まれたばかりのときはどんな様子をしているか」そして、「どのようにして 大きくなっていくか」を確認する。

読解は、時間の経過を表すことばをヒントに、どんな様子かを確認していく。大きさを表す表現「子ねこぐらい」、「やぎぐらい」がどの位の大きさを表すのか、ぬいぐるみや、枕などを使い、実際に手で大きさや重さを確かめ体験しながら理解を深めていく。この学年では、確認していった語彙を視覚的に繰り返し確認できるように、語彙の壁(現地校のVocabulary Wall)を作り掲示する。継承語学習者は日本語語彙が少なく、学習語彙が増えてくる2-3年生になると、読み教材の中に出てくる語彙をいかに習得するか工夫が必要である。

単元「どうぶつのあかちゃん」での、ライオンとしまうまの成長の違いについての学習から、肉食動物と草食動物の学習へと展開させ、それぞれの食べるものの違いから「歯」の特徴、消化の仕組みの違いへ目を向けさせる。また、「目の視野」、「足の爪と蹄」の違いについても実験を通し、その理由についても考えていく。実験は子どもたちの大好きな活動であり、結果は誰もが納得する理解へと導く。また、実験結果を記録することは大切な意味のある書く活動である。算数の「はかる」のねらいである、「定規を使って測ることができる(G3)」も学習し、結果を数字で比較することの意味を実感することができる。

続く単元「動物園のじゅうい」では、獣医の「仕事」に興味を持たせ、「獣医研修生」として獣医の仕事を学ぶ「獣医実習」へつなげる。「獣医実習」は、教材文の中で獣医が動物の病気をどのように治療したかを学習した後、動物のぬいぐるみを患者の動物に見立て病気を診断し、治療、カルテに書き込む活動である。

宿題の自由な発想で仮想動物園を作る「自分で考えた動物園パンフレット」作りでは、実際の動物園のパンフレットから、どのような情報が書かれているか、どんな工夫をすればみんなが来たいと思えるようなパンフレットになるかを自ら見つけ、自分のパンフレット作りに生かす。社会生活と結びつけ、実際の文字で書かれた情報が果たす大切な役割を考え、文字の意味を実感することができる。

#### 4.3 小4－5年生クラスのカリキュラムと指導例

中学年は知識欲、行動欲が旺盛な時期で、いろいろなものに興味、好奇心を示す時期である。また5年生は、児童期から思春期への移行の時期であり、精神的にも自立をしていく時期でもある。今まで保護者の意思によって続けていた継承日本語学校も、自分の意思で継続すると自分で決める「オーナーシップチェンジ」の時期でもある。このような特性を考え、「自ら発見することから、学ぶことを起動する」カリキュラム、指導を計画していかなければならない。

言語調査の使用言語の度合いのアンケートからも分かるように4年生になると100%の児童が日本語より英語が優位と答えている。現地校での生活時間が長くなり、また、放課後も宿題の量が多くなり、家庭に於いて英語で考え英語で話すことが圧倒的に多くなってくる。

学習内容を見ると、小学4年生からは具体レベルの思考から抽象レベルの思考へと移行していく。ニューヨークカリキュラムから、ランゲージアートの4年生では、「多読を奨励し、自分にあつた読書のねらいを決める」、「直喩や隠喩などの文学的な手法についての認識する」、「作品の主題を読み取ることや、異なった視点から作品の内容を評価する」、「説明文を書く際に比較・対照、原因・結果、時系列に整理する」というプライティングのまとめ方から「自分の洞察力、論理的展開を持ち、整理され、効果的な創作文、個人的な物語を書く」など、どんな観点で文章を書くか、また「問題を明らかにするために、要約や、理由付けするために文で説明する」からは、説得力のある説明文を書く時の引用文の使い方や、自分の書いたものを読み返し書き直す校正ができることが要求されている。また、5年生では「新聞の記事、本の何ページかを斜め読みして何が書かれているか、ある特定の情報を読み取る」、「文章の中で主張を支持する情

報か、そうでない情報かの違いがわかる」、「既習の知識を使って主題を理解し、読んだ情報について意見をもつ」、「一つのトピックに対して幾つかの情報源から読んで、情報や事実や考え方を解析し、情報を比較対照する」、「文章からの情報を基にして推論して結論を述べる」からもわかるように、多くの量の文章を読むこと（多読）、また、多くの種類の本や資料から情報を検索するというスキニング、速読の技術も要求されている。「書く」ことでは、4年生の自分の書いた文章を校正することに加え、「様々な手法（語彙の選択、考えを整理する方法-時系列、原因、結果などの形態に従って情報を整理すること、隠喩などの表現方法）を知り、それを使うことができる」ことがねらいとされている。「話す」では「いろいろな種類の本、脚本、詩などを声の調子、速さ、考えを強調する、文章の雰囲気を出すなど工夫して音読する」、「様々な聴衆者に対して正しい言葉遣い、文法、適切な語彙を使って考えを述べる」ことがねらいとされている。

このように、現地校では小4－5年生で抽象的思考力が要求されることから、日本語についても「抽象的思考や抽象語彙の意味を理解すること」また、「長い教材文を読み理解できるようになる」ことをねらいとした。具体的なステップとして「教材を読んで、内容をまとめごとによ約すること」、その中で、中心となる考えや、作者の意図や考えを表している部分、段落を見つけながら「主題を読み取る」ことをカリキュラムのねらいとした。

小4－5年クラスのカリキュラム、指導例をカリキュラムB（隔年各にカリキュラムA、Bを繰り返す）の「情報の伝え方」のテーマで紹介していきたい。

まず、このテーマのねらいを「情報には伝える側と受ける側の意図があることを教材から理解し、受ける側の興味を引きつける情報提供の仕方を考える」、「新聞の構造とその理由を通して学ぶ」、「読者に分かりやすい新聞の組み立てを考える、出来事や事柄を正しく伝えるために取材計画を立て、取材をし、事実を正確に捉える」、「記事を書くために、『いつ』、『どこで』、『なにが』、『どのように』を入れ情報を整理し、伝えたいこと、話の中心を明確にし、説明の仕方を工夫した記事を書き、自ら校正し仕上げる」とした。

そして、それに伴う日本語の言語領域のねらいを、「話す」では、「新聞について理解したことをわかりやすく例をあげて話すことができる、新聞作りの計画に基づき取材のインタビューでのやり取りができる」、「聞く」では、「インタビューのやり取りで、メモを取りながら話を聞くことができる」、「読む」では、「新聞を読む、スキニングから必要な情報を読み取るができる、教材文を読んで、段落ごとに書かれていることと

写真とをつなげ内容を理解することができる、友達の書いた記事を読んで、感想を持つことができる」、「書く」では、「取材したことを元に、記事を書くことができる、書いたことを読み直し、字の間違いや、漢字に書き直すなど進んで校正することができる、友達の記事を読んで、アドバイスを書くことができる」と設定をして授業、指導計画を立てた。

「情報を伝える」のテーマでは2つの単元に分かれ、前半は「アップとルーズで伝える」(光村4年下)の教材を通して、「アップ」と「ルーズ」という映像や写真の撮り方から「受け手の知りたいことは何か、送り手の伝えたいことは何か」、情報を伝える側の意図によってどのような写真を撮るかを読み取る。後半はその知識を生かして「みんなで新聞をつくらう」という単元で「新聞記者になろう」(光村4年)「みんなで新聞を作ろう」(東書4年下)の読み教材を通し、新聞の構造を知り、実際に新聞作りを行う。

まず導入として、私たちは情報をどのように得ているか経験を話すことから始め、さまざまなメディアの役割へと導いていく。次に、「新聞」について「新聞とは何か」を実際の新聞を使って視覚的にどんな記事に目が移っていくかを観察し、「わかったこと」から「新聞の構造」をまとめながら、「情報」「記事」「見出し」「小見出し」などの語彙を紹介していく。また、「新しい」「聞く」という漢字と英語のNEWSから「新聞」という言葉の意味を引き出していく。この学年で出てくる語彙の多くは漢字熟語で、普段の生活で耳にする生活語彙とは全く異なる音であり、その音から意味を推測することは難しい。漢字を成り立ちから学習している児童は、むしろ漢字からその意味を推測することができるようになってきている。しかし、実際にその語彙を使って話したり、聞き取ったり、読んだり、書いたりすることは難しい。このように学習に出てくる語彙は短冊にして掲示して、発言の中に使えるようにする指導が必要である。

新聞の構造を理解した後の「新聞を作ろう」では、学園のことを知らせる「BNG新聞」を作ることをねらいとし、編集会議を開きどんな記事を書くか話し合いをする。高学年になると話し合いを通して決定した内容をみんなで実行する集団運営ができるようになってきていることから、児童の話し合いを尊重しながらアドバイスを与えていく。どんな記事を集めるか、誰に、何を聞いたらいいかを考え「インタビューをしよう」にむけて準備をする。ロールプレーをしながら質問の仕方、敬語や丁寧な言い方、マナーを二人組で練習し、本番のインタビューを行う。

インタビューをしたことをメモに取り記事にし、記事にした文章は、友達同士で読み合い、間違えないか校正をする。「新聞の構造」で学習したことを元に、割付をし、

見出し、小見出し、どのような写真や、イラストがふさわしいか考え新聞として仕上げ保護者の前で発表する。印刷をした新聞販売を通して全校の保護者にも読んでもらうことで、自分たちの手で作った新聞に達成感を感じることができる。

この他、プロのカメラマンである保護者の話を聞くなど、テーマに関連してさまざまな角度からアプローチをすることで、テーマに対する知識もさらに深めることができる。

#### 4.4 中等部でのカリキュラムと指導例

ニューヨークの小学校はK（年長）から5年生となっている。学園でもニューヨークの学校制度に従い、2015年に6年生から8年生までを中等部として新たに設立することになった。昨年度の対象者は1名であったが、今年度は7名で、今後はさらに人数が増えていくことも踏まえ、新たに中等部のカリキュラムを作ることになった。

中学生は身体的にも、精神的にも子どもから、大人への移行期と言える。思春期に入り身体の急激な変化で精神と体のバランスが崩れてくる中学生のこの時期は、第二次反抗期とも言われ、自分の意思を通し主体的な判断で行動しようとする。

このことを踏まえ、生徒が学習に主体的に関わっていくことができ、現地校で学習していることと関連付けて学習することで自らが日本語で学習することの意味を感じられるようなカリキュラムを作っていくことはとても重要である。また学園が、一人一人の目標や信念を応援し、それぞれの個性や持ち味を發揮する場となり、この成長の大切な時期を乗り越えていけるようサポートをすることが大きな役割であると考えた。

中学生になると、現地校での学習はさらに抽象化し、難易度を増し、現地語の英語でこれまでに培った学習知識をもとに英語のロジックで考えるようになっていく。そこで、ニューヨークカリキュラムのアプローチを中等部のカリキュラム作りに生かしていくことが大きな鍵になる。6年生のカリキュラムと具体的な指導例を見てみよう。

ニューヨークカリキュラムのランゲージアートの学習のねらいを見ると、「読み」では、「どの教科、作家の作品においても一つのジャンルについて少なくとも4冊の本を読んで理解する（多読）」また、「読んだ文章について、質問、読み直す、要約する、視覚化するなどして理解を助ける方法を使う」など、自立した読み手になるため自分の読みをモニターするストラテジーを使うこと、「文学的な表現方法（直喩、隠喩）が作者の伝えたいことをどのように表しているかを理解する」として、作品の技術である修辞法の「比喩的用法」について、また「物語の中の登場人物が時間の経過（話の進行）とともに変わっていくことがわかる」など、作品を深く読み取ることを学ぶ。また「書く」においては「情報に関しての作文（記事、レポート）、文学的な作文（物語文、詩、ノ

ンフィクション) 評論(本、映画)、感想文(編集者への手紙)など、さまざまな文体や目的で書く」、「話す」では「学校の教科についての題で、ノートを取り、アウトラインを考え、視覚資料を使って5分から7分でできるプレゼンテーションをする」、「説得力のあることば、音、大きさ、ジェスチャーを使って自分の主張を聴衆者に訴える」ことが求められている。

社会科では、歴史で世界の4大文明から東半球における歴史について学習する。日本でも6年生の前半で日本の歴史について学習することから、一学期は5年生での日本の歴史の学習の続きをテーマにカリキュラムを進める。ここでは、ニューヨークカリキュラムランゲージアート6年にあるように、「いくつかの資料から必要な情報を読む」ことをねらいに、複数の本や資料の中から、「どんな時代だったか」の背景を知り、「どんな人物が、何をしたのか、なぜそうしたのか、既習の世界の歴史、自分の生活、社会、環境と対比して考える」というように、興味を引き出し指導していく。そして、ニューヨークカリキュラム6年社会科の項目「歴史的な出来事と現代の出来事を比較、対照することができる」にもあるように、歴史を身近に感じることで「歴史の面白さ」を引き出していく。

二学期には日本の文化「まんが」をテーマに、手塚治虫の伝記を通して「伝記」というジャンルについて学ぶ。自分のアイデンティティを意識する年齢にさしかかり、人の生き方に触れ、それぞれ皆違った生き方があり、そのユニークさが貴重で、特別であることを読み取ってほしい。また、読み教材「まんがの方法」(教育出版5年)という「説明文」を通してまんがの特徴を読み取りながら、実際に手塚治虫の漫画を読み、筆者の意見や考え方をどのように伝えているかを見つけ、実際に自分でまんがを描いてみることで学び取る。ここでは物語の創作を「まんが」という形で表現する。ランゲージアートカリキュラムの「物語の中の登場人物が時間の経過(話の進行)とともに変わっていくことがわかる」という創作する視点を与えることができる。

三学期は4-5年生での「新聞作り」につなげ「学校案内パンフレットを作る」をテーマに、情報の「伝えかた」を、方法、手段について読み取りながら、実際に「どんな人に、どんなことを、どのように伝えるか」を考えながら取り組む。これは、ニューヨークカリキュラムの6年ランゲージアートの「情報に関する作文(記事、レポート)、文学的な作文(物語文、詩、ノンフィクション) 評論(本、映画)、感想文(編集者への手紙)など、いろいろな文章のスタイル、目的で書く」に対応させた取り組みへとつながる。学年末のプレゼンテーションは、「教科についての題で、ノート、アウトライン、視覚資料を使って5分から7分でできるプレゼンテーションをする」「説得力のあるこ

とば、音、大きさ、ジェスチャーを使って自分の主張を聴衆者に訴えることができる」のねらいをあてはめることができる。

中等部の指導では、教師は生徒が主体的に計画することをサポートしていくという立場をとることが重要である。自分で計画することで、自らの責任を自分で負うことから、学習が自分のためであるという意識が自ずから生まれる。例えば、歴史の学習のまとめとしての「本を作り」では、一人の人物に焦点をあてるか、歴史の流れに焦点をあてるか、制度や仕組みについて焦点をあてるかなど、オープンエンドで自ら計画を立てる。教師はそれに対して、どのような資料が必要かなど生徒から質問を受けたことに対して、アドバイスを行っていく。自ら取り組むことに価値を置き、授業での自分の理解を自分の方法で表現し教師はその過程を支援する。生徒は、教師から支援を受けながら、問題解決のテクニックを学ぶことができる。中学生の場合は自分の必要とすることを自ら表明することができるので、自分の必要とする助けを得ることができる。学習の中では、「わからないことがわかる」ことが理解の大きなステップである。

昨年度の学習発表会では生徒自ら「落語」を演じることを決め、「初天神」の話の舞台を現代のブルックリンに書き換えることを提案、教師と一緒に話を作り演じることになった。生徒と教師のやり取りを通して、生徒自身が伝えたいものを自ら作り上げていった。プレゼンテーションにおいては、現地校で学習した「心臓のはたらき」をテーマに決め、英語で理解したことを日本語で説明することに自ら挑戦した。日本語の学習語彙を使って多くの聴衆者に説明をすることができた。日英バイリンガルでプレゼンテーションができるようになったことが大きな自信となった。注目すべきは、この過程を通して生徒が今まで言い表せなかった語彙や表現を自ら増やし、自分が主体となり「わからないことをわかるようにする」ことができたことである。

#### 4.5 漢字学習、手作り教材、IT を使った取り組み

学園のカリキュラムのもう一つの特徴は成り立ちで学ぶ「漢字学習」である。日本語の学習で大きな壁となる漢字学習であるが、学園では、年中クラスから成り立ちを通して漢字を学習している。表音文字の平仮名、片仮名よりも、象形文字の漢字は、形に意味があるのでわかりやすい。形がわかる、意味がわかると、だんだん漢字が面白くなる。また、漢字の成り立ちから見える漢字の背景、漢字の世界が面白くなる。低学年では「101カルタ」を通して、漢字の基礎となる「101の漢字」を、テーマを中心としたカリキュラムにつなげて学習する。中学年では漢字がどのように組み合わさっているかを学びながら、その共通する部分が形だけでなく意味の上でもつながっている

ことを部首について「98部首カルタ」で学ぶ。また、その組み合わせられてきた漢字の部分が同じ音を出していることから、音を表す漢字が形声文字として組み合わせられていることを「108形声カルタ」で学ぶ。

年中から中等部の児童生徒は、体でその漢字を表現して漢字を感じる活動を取り入れている。新しい漢字が出てくると、子どもたちは自分たちの感性、既習の知識を結集して分析をする。中等部の古墳時代の授業で「副葬品」という漢字が出てきた時にも、生徒は「葬」という漢字を見て、「草冠」「死」両手で持つ手を表す「にじゅうあし」に分けて、死という文字が入っていることから死んだ人に関係するものだと推察していた。

漢字は「わかりやすい」、「かっこいい」と感じている児童生徒は漢字を書きたがる。漢字の書き順は「十の画べえ」を使って頭の中に書く、唱えて書くことをマスターすると、鉛筆を持って自然と書けるようになる。継承日本語学習者は漢字を暗記して書けるようにするのではなく、漢字を理解する、漢字の意味がわかることの方が大切である。

このような漢字学習の「ぼくの・わたしの漢字帳」も、文章の読解のワークシート、年少クラスのマイブック、毎回の宿題や音読シートなど、教材はすべて手作りで行っている。それは、カリキュラムにそった学習のねらいが明確だからである。ねらいに合わせて手作りする教材は、学園の指導の大きな要となっている。

指導、教材作りにはさまざまなITの技術を取り入れている。パワーポイント、カムタジアというアプリケーションを使って、視覚教材を作り、教育ビデオ番組などの視覚教材とともに、効果的な指導に取り入れている他、家庭学習と連携するEmail通信やビデオ通信での子供達の宿題の紹介、授業で学習した歌、音読教材、学習発表会練習用の歌や台詞の音声を発信している。中等部では、ワードを使って文章入力、漢字変換、構成、編集するといった指導にも活用している。

## 5. まとめ

ブルックリン日本語学園が開校して丸5年が過ぎ、子どもたちの成長とともに学園も大きく成長をとげた。2015-2016年度が終え、今までの歩みを振り返って学園に通う子どもたちからは、「劇を日本語で演じて自信ができた」、「日本語を学んで日本にいる祖母、祖父と話ができて良かった」、「夏休みに日本に行って日本の学校の先生や友達と日本語で話すのがとても楽しい」、「いろいろなスタイルで日本語を学んだ経験はとても貴重だ」、「授業のテーマが変わる度、次は何かとわくわくする」、「日本語が話せるこ

とで、日本語でしか話せない友達も沢山でき、日本語でしか読めない本に出会え、いろいろな面で世界が広がった」、「英語と日本語が両方話せることのパワーを感じる」また、保護者から、「日本語の力がついていき、その日本語力が奥底で自信、芯としてアイデンティティーの確立に大いに影響している」、「コミュニティの人達は兄弟のような、家族のような存在」、「創意工夫された内容を通して日本語を学び友達や先生と日本語でコミュニケーションが取れる場」、「日本人のルーツへの意識が芽生え、積極的に日本語に取り組むようになった。5年間ともに過ごしてきた友人たちは、一緒に育った幼馴染のような関係で、平日通う現地校はバラバラでも一生の友人になれる」という声を学園の新聞に寄せてくれたのを読むことができた。

これを読んだ時に5年前の学園設立を望むブルックリン日系人コミュニティの学校作りを叶えることができたと思うと同時に、新たな課題に取り組まなくてはならないと感じている。

次の課題として「中等部のカリキュラムの完成」、「ITを使ったプログラムの開発」、「作文教育の確立」、日本語の取り組み方を一緒に学べる「親子プリスクールクラスの開設」(2016年度から)、「継承語教師養成ワークショップ開催」、「非日本語話者の保護者のための日本語クラス開設」(2015年度から)、「JFLのクラスの開設」があげられる。

これらの課題に向けて取り組んでいくことで、ブルックリン日本語学園での継承日本語教育の実践が世界に広がる継承語学校のモデルとなることを願っている。

## 注

- 1) ブルックリン日本語学園 <http://bjafa.org/nihongogakuen/>
- 2) コモンコアスタンダード <http://www.corestandards.org/>
- 3) ブルックリン子育て便利帳 <http://brooklynbenricho.org>
- 4) ニューヨークカリキュラム <http://www.p12.nysed.gov/ciai/cores.html>
- 5) Bonnie Campbell Hill “Developmental Continuums” <http://www.bonniecampbellhill.com/developCont.php>
- 6) Reading strategies <http://www.qcsd.org/Page/3718>  
<http://www.readingrockets.org/article/seven-strategies-teach-students-text-comprehension>

## 引用文献

- 内田伸子 (1999) 「やり取りに参加することを通してことばを学ぶ」『発達心理学』64,1-2. 岩波書店
- 中島和子 (2010) 『マルチリンガル教育への招待』ひつじ書房